



「総合教育会議」は平成27年度から、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の規定により、市長と教育委員会が地域の教育的課題などについて情報を共有し、協議する場として設置されました。昨年度の7月に「東久留米市教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱」(以下「大綱」と略す)が改定されましたが、「大綱」に関わることも、総合教育会議における協議事項の一つです。

今号では、令和5年度に3回開催した「東久留米市総合教育会議」の概要をまとめてお知らせします。主な議題は、神奈川県大和市の複合化した生涯学習施設の視察報告、有識者を招いての講演会と意見交換、さらに不登校やいじめの取り組み及び「第3次教育振興基本計画(原案)」についての意見交換などです。

会議の詳細はホームページ、または図書館や市政情報コーナーに配架している議事録及び資料をご参照願います。詳しくは教育総務課庶務係 ☎042・470・7775へ。

令和5年度は盛りだくさんな議題で3回

総合教育会議を開催しました

第1回

【内容】教育委員報告「神奈川県大和市の生涯学習施設『大和市文化創造拠点SiRIUS(シリウス)』の視察」について
【日程】令和5年8月7日(月) 9時50分～、市役所会議室

初めに行政経営課公共施設マネジメント担当課長から、資料の『未来志向の公共施設マネジメント』トクあなたとつくるまちの「ミライ」により、「公共施設マネジメント」についての説明があり、続いて、教育委員と教育長による視察報告、市長との意見交換を行いました。

視察報告

集う楽しさが随所に
見られるシリウス

○委員 6月下旬に視察した「シリウス」は建物全体が図書館になっていて、階ごとにお年寄りのために配慮されたスペースもあり、子どもたちにも「遊んでもいい」というスペースもあった。普通、図書館ではお互いに静かにしていることが求められるが、ここでは語り合ったり、勉強も思う存分できるといふ、とても素敵な配慮がされていた。本を読んでもらうだけでなく、「人が集う場所」に特化しているのがよく分かった。

の居場所にしようという発想が、フロアづくりや図書館の運営にも反映されていた。どのフロアの書架からも自由に書物を選び、他の階からも返却できるシステムは素晴らしい。
○教育長 四つの施設が互いに相乗効果をもたらす、施設の複合化による高機能化を図っている。部屋の多くはガラスで仕切られ、建物と人の一体感や開放感を生み出し、境目のない「シームレス」な施設という感じがした。
さまざま機能を持つこの施設を運営・維持管理しているのは6社の民間企業から成る指定管理者で、各企業が持つノウハウや特性を生かした仕組みとなっている。
新たな指定管理者の仕組みとして、多様で高度なサービスを提供できる企業の複合体が施設等を管理していることは非常に参考になった。

複数の企業が集結し、効果的な維持管理

意見交換

施設を保有し続け、更新することは困難

○委員 公共施設の維持には、修繕や来るべき政策に相当な額が必要になるが…
○市長 計画どおり行くと、毎年25億円の維持管理・更新コストがかかる。今後の50年を見据えた東久留米市の新しいまちづくりを進めていくには、公共施設のあり方、市民サービスの提供等をこれからの時代に即したものに変わっていく必要がある。

「新たな付加価値を加えた未来志向の公共施設マネジメント」の始動

○委員 今般、市長が掲げた「新たな付加価値を加えた未来志向の公共施設マネジメント」は素晴らしい方針だ。市民が使いたいと思える施設を造り、都市としての魅力を創出できれば魅力あるまちづくりになると思う。
○委員 社会教育施設の建て替えについての一歩踏み込んだわれわれ教育委員の意見を、今日初めて聞かれる市長は驚かれるのではないか。視察後の教育委員同士の話では、「時代の変遷

により、施設の複合化は自然な流れである。既存の社会教育施設を複合化し、新たな社会教育施設を描く時期が近づいている」と、全員一致したことをお伝えしておきたい。

○委員 社会教育施設の複合化は、市の将来を見据えてのコミュニケーションの構築における「物理的な仕掛け」になると思う。今の位置に複合化した社会施設を造ることをきっかけに、駅西口からこの施設までの通りを、さらに施設から小金井街道に出るまでの道路にも新たなにぎわいをつくるのだろうか。

令和5年の施政方針では「にぎわいのあるまちづくりには、空間と人の往来」が必要である」とある。現在の図書館と生涯学習センターのある場所に新たな複合施設ができるのであれば、まちづくりのために一役買ってほしい。

○委員 駅西口から生涯学習センターまでは広い道路で、とても静かな4500人収容のマロニエホールがある生涯学習センター。左隣りは中央図書館。



環境だ。その景観がよくて住んでいらつしやる方々にもまちの変化を喜んでもらえて、「住んでよかったな」と思ってもらえるといいと思う。深まる議論の展開に、富田市長も驚いた!



なんと…

○委員 今後は全庁的な議論を経て、地域のニーズや社会教育施設のあるべき論なども含め、利用者からも多様な考えが出てくるだろう。建て替えや複合化が決まるまでは真摯で丁寧な議論を重ねていく必要があるが、議論そのものは早く進めていくべきだと思う。

社会教育施設のあるべき姿について、教育委員会としてビジョンを持ちたい

○委員 建て替えに関する検討が始まることから、その時には、教育委員会として、図書館と生涯学習センターの将来あるべき姿の個々のビジョンも持っているべきだと思う。図書館と生涯学習センターが融合できる部分と個々に持ち続けるべき役割を明確にして、建て替えや複合化の議論に入った方がいい。

○委員 新たな社会教育施設が、東久留米市を象徴するランドマークの役割を果たせるものになってほしいと強く願って

「まろにえ富士見通り」は雄大な富士山を正面に仰ぎ、冬至に近い日時には太陽がその頂(いただき)に沈むダイヤモンド富士を眺められる、東久留米のランドマークである。この道は、天文学に造詣の深い市民の意見により、設計変更された経緯もあると伺っている。まろにえ富士見通りに続く道沿いに、にぎわい溢れる複合施設が建てられるのであれば、これも天文学とともに歩み始めていると言っても過言ではないと思う。市民の皆さんも、この通りに、そういうロマンを求めていらつしやるのではないかと。

○市長 今年度、公共施設マネジメントでは、優先的に検討する施設として生涯学習センターと旧下里小学校を挙げたところ、早速、最先端の社会教育施設を選んで視察してください。このことは、学校教育のみならず社会教育についても目配り、心配りをしているからだと思っ

(1面から続く)

「1面から続く」
だけるとは、私自身も想定していなかった。大変感謝している。

ご提言やご意見は市長部局に持ち帰り、今後の公共施設マネジメントの議論につなげていきたい。

第2回

【内容】 人間文化研究機構総合地球環境学研究所長、前京都大学総長の山極壽一（やまぎわじゅいち）先生との意見交換▶山極先生による「人間にとって学びとは何か」と題した講演会
【日程】 令和5年11月10日（金）9時～、市役所会議室

意見交換

山極先生との
さまざまなお話

○委員 小学生の時、「将来はアフリカに行って自然保護の活動をした」と思っていた。アフリカでゴリラの保護活動をされている先生をテレビ番組で見て感動し、先生に手紙を書いたところ、「森の巨人」という子ども用の本と手紙を送ってくださった。

事務局から「総合教育会議に山極先生をお招きできるかもしれない」と聞いた時は大変驚いたし、今日の日を心待ちにしていた。

○教育長 以前、山極先生と解剖学者である養

老孟司先生との対談をまとめた「虫とゴリラ」を拝読した。

4年前、自由学園が養老先生を東久留米市にお招きしたそうだが、著名な学者のお二人に東久留米市においていただいたことは、事務局としては誇らしく思っている。

○委員 私はお二人の先生とは、専門誌の「學燈」（がくとく）でお会いしている。

創刊号の夏号の巻頭に養老先生が「今私たちが学ぶこと」というテーマで書かれていて、秋号の巻頭にはなんと山極先生が「共にある、共に生きる」というテーマで、「人の共感性」について書かれていた。

○山極先生 皆さんと私のいろいろな場面での出会いのお話を聞いていると、何か不思議な縁を感じる。

不登校といじめ

○委員 山極先生は、「共感性」として、「共存感覚には身体の共鳴や接触が必要であることを忘れずに、これからの社会を構築するべきである」と書かれている。

特に不満はないです…



子どもの不登校、いじめ、暴力等の多くの問題が増え続けているが、この問題の解決に公約数があるとすれば「共存感覚」だと思ふ。先生の著書で

ある「スマホを捨てたい子どもたち」では、絶え間ない技術革新の粋を集めた便利なスマホに視点を当てながら、「実は子どもたちは生きづらい」と思っている。スマホでつながることに不安を感じているのではないかと、捉え直しておられる。

○山極先生 本当にいろいろお読みいただいていて、ありがとうございます。国民国家の成立以来、国家に従順な若者を育てることが教育の大きな目的だったが、今は、子どもに代わっていると思う。

子どもたちは非常に狭い、小さい世界の中で暮らしているから、小さな集団の中で「いじめ」は起こる。閉ざされた世界にやり切れなくなると「その世界から逃げ出したい」「友達との関係を切りたいのに切れない」という、逃げ道がなくなっている状況にある。それが今度フリースクールやオンライン教育に逃げ道を求めている。今こそ「教育」について考え直さなければならぬ時代にきていると思う。

外交力や経済力よりも、日本は小・中学校の教育力の高さを誇るべき!



講演中の山極先生

○委員 アフリカの現地学生の招聘（しようへい）などを通じて、「日本の教育力こそ誇れるものである。外交で経済力や技術力を競うよりも、教育力の高さを示すべきだ」と発言されている。日本の教育力の中で、公立の小・中学校が優れていると思うことはあるか。

私たち自分たちの能力を伸ばすことが奨励されている。「自己責任」「自己実現」の標語に表れているように、「自分が、自分が」という意欲を持つことを意識づけられている。でも、学校には相も変わらないカリキュラムがある。子どもたちが一斉に答えを見つけない学校教育そのものが、子どもたちの個性を伸ばす教育には合わないのでは、不登校にもつながっているのではないか。

あらかじめ決められた問いに対する答えを見つけている能力はあるが、自分で問いを立てられないし、相手を挑発して議論をつくるテクニクも身に付けていないし、高校や大学で「自分で問いを立てて解いていく」ことができていくことができない。「議論の中で新しい答えを見つけていく」という論点の立て方であり、勝ち負けはない。それが今度フリースクールやオンライン教育に逃げ道を求めている。今こそ「教育」について考え直さなければならぬ時代にきていると思う。

自分で考え、自分の意見を持つことで勝負すること

自分で考えたことで勝負せよ！ということを徹底的に仕込まれた。それは国際的な舞台に立つと非常に実感する。「なぜ君はそう考えたのか」「それは一体何を意味しているのか」と、問い詰められるからである。「サトルが言ったから」「ニッチェが言っていたから」では通用しない。「山極の体験から、こういう発想が出てきた」と言わないと勝負にならない。「これが自分をつくることになるんだ」ということに気がついたことが、私が「変身」したところかなと思う。

高校が大きく変わってきた

○委員 先生も都立高校の出身だが、都立高校が変わりつつある。男女別定員制度が全廃された。（※男女別定員制度（都立高校）：都立高校は全国で唯一、生徒の男女比をほぼ同数にするため入学試験における男女別定員を設けていたが、令和6年度の入試から撤廃した）

○山極先生 本場に「高校」は大きく変わってきている。N高、S高という学校種を聞いたことがあると思うが、もはやN高は学生数2万5000人を超えた。

○委員 先生も都立高校の出身だが、都立高校が変わりつつある。男女別定員制度が全廃された。（※男女別定員制度（都立高校）：都立高校は全国で唯一、生徒の男女比をほぼ同数にするため入学試験における男女別定員を設けていたが、令和6年度の入試から撤廃した）

海外の大学への進学資格が可能な世界共通のプログラム

○山極先生 留学組も増えてきている。イギリスのボーディングスクールが3校も日本へ進出してきた。年間1000万円ぐらいの学費がかかるが、富裕層はそういうところに子どもを入れて、ケンブリッジやオックスフォード大学に入学させようとしている。日本の高校ももっと国際化を意識し、日本の大学への進学率やランキングだけを

自分でも考えたことで勝負せよ！ということを徹底的に仕込まれた。それは国際的な舞台に立つと非常に実感する。「なぜ君はそう考えたのか」「それは一体何を意味しているのか」と、問い詰められるからである。「サトルが言ったから」「ニッチェが言っていたから」では通用しない。「山極の体験から、こういう発想が出てきた」と言わないと勝負にならない。「これが自分をつくることになるんだ」ということに気がついたことが、私が「変身」したところかなと思う。

自分で考え、自分の意見を持つことで勝負すること

自分で考えたことで勝負せよ！ということを徹底的に仕込まれた。それは国際的な舞台に立つと非常に実感する。「なぜ君はそう考えたのか」「それは一体何を意味しているのか」と、問い詰められるからである。「サトルが言ったから」「ニッチェが言っていたから」では通用しない。「山極の体験から、こういう発想が出てきた」と言わないと勝負にならない。「これが自分をつくることになるんだ」ということに気がついたことが、私が「変身」したところかなと思う。

海外の大学への進学資格が可能な世界共通のプログラム

○山極先生 留学組も増えてきている。イギリスのボーディングスクールが3校も日本へ進出してきた。年間1000万円ぐらいの学費がかかるが、富裕層はそういうところに子どもを入れて、ケンブリッジやオックスフォード大学に入学させようとしている。日本の高校ももっと国際化を意識し、日本の大学への進学率やランキングだけを

海外の大学への進学資格が可能な世界共通のプログラム

○山極先生 留学組も増えてきている。イギリスのボーディングスクールが3校も日本へ進出してきた。年間1000万円ぐらいの学費がかかるが、富裕層はそういうところに子どもを入れて、ケンブリッジやオックスフォード大学に入学させようとしている。日本の高校ももっと国際化を意識し、日本の大学への進学率やランキングだけを

海外の大学への進学資格が可能な世界共通のプログラム

○山極先生 留学組も増えてきている。イギリスのボーディングスクールが3校も日本へ進出してきた。年間1000万円ぐらいの学費がかかるが、富裕層はそういうところに子どもを入れて、ケンブリッジやオックスフォード大学に入学させようとしている。日本の高校ももっと国際化を意識し、日本の大学への進学率やランキングだけを

気にかけてはいけないう。学生が既に外に目を向け始めていることに、先生たちは気がつかないといけない。

国際バカロレアはその一つの窓口だと思う。（※ボーディングスクール：寮制学校のこと。全寮制インターナショナルスクール（英語公用語）と全寮制スクール（現地語）の2種類がある）

子どもに求められている君はどう生きるか。大人はどう答えるのかな…

○市長 山極先生も触れられていたが、今の子どもたちには「自己実現」「自己責任」「自分らしく生きていく」と投げかけられていて、そのこと自体はすごくいいと思っ

ている。古い常識の枠の中で生きると言われるより、「自分らしく生きるよさ」「夢を持ちなさい」と言われて育つ子どもは幸せだと思ふ。

しかし、小・中学生の時に自分らしさを求められても、「自分って何だろう」と、解答を見つけれない子どもたちもたくさんいるだろう。正解をきっちり教えられている今の学びの中で、急に「正解は幾つあってもいい」「自由に生きていい」と言われても、どうしていいかわからない子どもの方が多いのかもしれない。義務教育課程の中で育っている子どもたちに対して、教育委員会がで

（3面に続く）

(2面から続く)

きることのヒントを伺いたい。

○山極先生 今はいわゆる「VUCA」の時代」と言われているが、未来を確実に生き抜けるような手本となる、いいモデルをわれわれの世代は持っていない。だから、若者も私たちも、「今も将来も未知数なんだ」ということを知ることが重要だと思う。

○教育長 人間社会の基盤となっている能力に、先生のおっしゃる「共感力」があると思う。引き続き、山極先生には「人間にとつて学びとは何か」というテーマで講演していただくが、子どもたちの学びを組み立てる上で、人間にとつての学びを改めて考えることはとても意味があり、「リスキリング」*や「学び直し」が大人にも求められる時代になり、大いに参考になると思う。

(※ロールモデル…お手本となる人物のこと ▶ VUCA…Volatility 変動性、Uncertainty 不確実性、Complexity 複雑性、Ambiguity 曖昧性のこと ▶ リスキリング…新たな分野や職務において新しいスキルを習得すること)

※第2回は、意見交換の主な内容をお知らせしました。講演の詳細は議事録をご覧ください。

第3回

【内容】「(1) 令和4年度児童・生徒の生活指導に係る各種調査結果」及び「(2) 東久留米市第3次教育振興基本計画(原案)」についての意見交換
【日程】令和5年11月28日(火) 午後1時5分～、市役所会議室

(1) 児童・生徒の生活指導に係る取り組みは…

初めに指導室の統括指導主事から、関係資料の説明があり、意見交換に入りました。

○市長 報道でも大きく取り上げられたが、令和4年度の国の調査によると、いじめの認知件数と小・中学校の不登校児童生徒数が過去最多となった。この議題を取り上げるのは、こども家庭庁が地域におけるいじめ防止対策の体制の構築を推進するため、首長部局からのアプローチによるいじめ防止対策の強化を図っており、各自自治体では総合教育会議の議題として、首長及び関係各課と認識を共有し、対策の検討を進めることが求められているからである。

私は、いじめに関しては、第一に、被害児童・生徒に寄り添った対応を取ってほしいと思っいる。加害児童・生徒に対しても、その背景についてできる限り個々の対応

を取ってほしいし、必要に応じて首長部局との連携も図ってほしい。不登校に関しては、以前は学校に戻さなければいけないのではないかと考え方があったかもしれないが、今はそれぞれの子どもを取り巻く環境やその子ども自身への状況も見ながら、こちらも個々に寄り添った対応をとってもらいたい。

これまでの市の総合教育会議の取り組み

○委員 文科省からの通知が届く以前から、東久留米市の総合教育会議では、不登校やいじめの問題を積極的に取り上げてきている。

令和2年度には「パラサイト・シングル」という言葉の生みの親である中央大学の山田昌弘先生をお招きし、「東久留米市の8050問題」を取り上げた際、背景にある子どもの引きこもりと不登校問題についても議論をしていた。

令和3年度には、「学びの継続」をテーマに江戸川区の公立中学校の夜間学級を視察した報告をし、合わせて本市の研究指定校である下里中学校から「全ての生徒の居場所づくり」不登校対応と未然の防止対策」をテーマとする研究報告を受けて話題とした。

令和4年度には、大綱やこの総合教育会議が法を改正してまでも設置されるきっかけとなった、大津市立中学校2年生の

男子生徒が自殺した事件に対して、第一線で対応された前大津市長の越直美弁護士をお招きした。いじめに対する意見交換を行い、講演ではその後の大津市の取り組みについて伺った。

また、令和5年度の先日の総合教育会議では、京都大学の前総長である山極壽一先生をお招きし、講演の中で、いじめや不登校等の問題についてご示唆をいただいたばかりである。



○委員 本市の総合教育会議では、市長が積極的に教育的課題について情報を得る場を設け、教育委員と意見交換をしてきた経緯がある。

今後はこの話題は設立に向けて準備をされている、こども家庭センターを中心とする関係部局と教育委員会が連携して取り組む場においても話題にされることになるが、本市の総合教育会議には十分な下地という意識がある中で、さらに状況の改善を図っていくことにつながっていくと思う。

学校が取り組む不登校の対策は…

○委員 文科省の調査

では、小・中学生の不登校の要因について、「無気力と不安、学業の不振、いじめを除く友人関係をめぐる問題」として「本人由来」を挙げているが、実は「不登校の要因は学校関係に多くある」という分析結果も出ている。学校内部が抱えている問題は、本当に大きいのだろう。

しかし、学校ができることがある。不登校の解決策は「チームとしての学校」による魅力ある学校づくりを推進することである。教育委員会は学校を支え、励まし、学校と一体となって進めていくことが大事だと思っている。

(※チームとしての学校：学校が複雑化・多様化した課題を解決するため、教職員のほか専門性のある職員が加わり、教職員の配置やマネジメント、組織文化等の改善に一体的に取り組むという学校が行う取り組み)

○委員 不登校になったお子さんに対する対応療法的な対応も大事だが、学校でできることとして、学校風土の改善などの「未然防止」の取り組みについて、もっと考えていかなければいけないと常々感じている。

○委員 計画にある「相談機関との連携」は、とても大事なことで、学校では対応をスクールカウンセラーに任せつつ切りが必要に応じて取り上げていくことである。本市の子どもたちにはこう

薬は正しく使いましょう!

～おくすり教育推進協議会等が教育活動を支援



「オーバードーズ」という言葉を聞いたことがありますか。「オーバードーズ」とは、ドラッグストアなどで購入できる風邪薬等の市販薬を大量に、頻りに服用することです。用法や用量を守らずに服用し、健康被害が起きたり依存症になったりすることが若い人に多く見られるようになり、問題となっています。

昨年、清瀬市・小平市・西東京市、東村山市及び東久留米市で活動する有志の薬剤師により「おくすり教育推進協議会」等が設立され、同協議会では薬の正しい使い方や薬物乱用防止を啓発する教育活動を行っています。その一環として、昨年の9月、5市の公立小・中学校に在籍する児童・生徒を対象に、薬を正しく使うための標語を募集しました。最優秀賞と優秀賞は以下の通りです。

【最優秀賞】(小中1作品ずつ)「くすり」はね 正しく飲めば みんなの味方」市立第五小4年・秋元花菜さん ▶ 「その薬 ルールを守って 健康に」市立東中2年・寺村実優さん【優秀賞】(各市中小1作品ずつ)「その薬 自分のためだよ あげちゃだめ」市立第十小6年・徳本權埜さん ▶ 「身に付けよう 薬の知識 気をつけよう 飲みすぎ注意」市立中央中3年・西川 吟さん 詳しくは学務課保健給食係 ☎042・470・7779へ。

総合教育会議をさまざまな連携の足がかりにする

○教育長 いじめの防止については児童・生徒に互いを認めて尊重することや「いじめ」が許されない行為であることを理解させ、大人も子どもも一丸となって、いじめのない学校づくりを進められるよう各学校を指導・助言し、市民に向けても発信していきたい。

不登校の児童・生徒が年々増えているのは、学校教育について見直しを迫る現象であると思う。子どもの成長・発達を十分に理解し、学校が安心して過ごせる場となり、通学することで成長を実感できるよう、教育課程の工夫や指導の充実を図るべく、学校に働きかけていく。

○市長 この総合教育会議でできることは、不登校問題やいじめ問題などを必要に応じて取り上げていくことである。本市の子どもたちにはこう

意見聴取の方法を変更

○教育長 市民等の意見聴取についてはパブリック・コメントのほか、これまでの、公募の保護者等や各教育関係団体の皆様一堂に会する懇談会形式をとってきたが、市民からの直接の意見をさらに伺うため、懇談会は保護者や教員を目標としている学生、生涯学習実践者等の応募枠による公募市民等を委員として開催することとした。教育関係団体の皆様からは別途、書面にてご意見をいただくようにした。これにより、懇談会委員の市民枠は3名以内から合計8名以内と、倍以上になった。

今後、子ども家庭部や福祉保健部と教育委員会がさらに連携を深めることで、単発ではなく長期的な取り組みが行えるようになり、部署ごとで考えている段階では思いつかないような取り組み事例を紹介し合ったりすることができると思っている。関係部署の連携については、私も、身をもってその強化に向けて取り組んでいく。

○市長 「第3次教育振興基本計画(原案)」のポイントを伺いたい。

○委員 位置づけが大

地域と連携した教育の推進

○委員 地域との連携は、国際社会の担い手を育成する上で、グローバルに活躍できる人材の育成と並んで、「地域と連携した教育の推進」に位置づけられた。「地域をベースに世界を見据えてほしい」という願いが込められていると思う。

英語力をつけ、地域のよさを理解して大切に思えるようになることで、異なる文化の相手にも敬意を持ち、自国も大切に思う気持ちが育っていくことが期待されている。

《地域愛を育む 体験学習事業》

○委員 地域のよさを

知るには、さまざまな体験的学習を授業の中で実施してもらうことが効果的だ。地域の協力が必須なので、地域の方々には、地域における子ども

(3面から続く)
私たちの体験がいかに意義のあることかをさらにご理解いただき、子どもたちを意識した活動に広げてもらえるといい。

地域での体験学習については、教育委員会の事務事業の外部評価者からも、「地域で生きていくためにも地域を理解し、地域への帰属意識を深めることは重要である」と、その基盤となる体験学習の重要性を指摘されている。

《課題が見えてきた、地域との関わり方》

委員 「地域と連携した教育の推進」については、地域を構成している団体の意見から、二つの課題が窺(うかが)える。

一つは懇談会委員の青少年健全育成協議会(以下「青少協」と略す)の会長が、世代交代したくても後継者のいない現実を訴えておられることである。「年々、強く求められている『地域の力』だが、皆さんからの要望、期待がとも大きいと感じている」と発言される一方、「青少協にも地域にも高齢化の波が押し寄せている。実際に高齢化した地域をどうすり合わせて活用していくか」としているのかと。

委員 ここで述べられているいわゆる「地域の力」に対しては、学校としては感謝の気持ちでいっぱいだろうと思う。「地域の方々には学校教育を支援していただく」という考え方が基盤にあるからだ。

しかし、少子高齢化により社会は激しく変化している。このように「支援」という考え方は、青少協の会長が指摘されているような限界が近づいていると感じざるを得ない。「地域清掃をするから応援に来てほしい」と地域から声がかかれば、学校としては「花壇の整備を手伝ってもらったから今度は行かないと悪いな」という気持ちも多分にあると思う。



学校用務さんをお手本に！

学校の負担感も生じてきていて、地域連携が「地域の力の貸し借り」にならなくてはいいだろうかと。自分たちが当事者として、共有した目標に向かって対等な立場で活動する協働関係が大切なことを再認識する必要がありますが、この課題の中に潜んでいる。

その課題解決には、地域社会において、開かれた教育課程の実現が必要なことである。社会のつながりの中で学ぶことで、子どもたちは「自分の力で人生や社会をよりよくできる」という実感を持つことが出来る。よりよい社会をつくるという目標を学校と社会が共有することが必要だ。

もとの障害のない子どもが可能な限り共に学ぶ機会を増やすことを追求する」とある。しかし、「特別支援」という言葉が浸透してきた反面、「支援を必要とする子どもに対して、通常学級においてどこまで支援できるか」と考えるより「特別支援教育は特別支援が必要だから専門家の範疇(はんちゆう)だ」と捉えがちではないか。

通常学級から特別支援学級に移る児童・生徒の中途転級が多いことは適正な学級場を選択しているとも言えるが、学校ではインクルーシブ教育の理念を理解する機会が少ないので、若手の先生も含め、「通常学級では指導できない」と考えてしまうことが多いと思う。

教員の多忙は認識しているが、学校全体で「合理的配慮」*を含めた特別支援教育の理念をしつかり学ぶ必要がある。それは研修が大事である。(※インクルーシブ教育：多様な子どもたちの地域の学校への通学を保障するために教育を改革するプロセス)合理的配慮：各学校で障害のある子どもに対し、その状況に応じて個別に提供されるもの)

新・教育振興基本計画に望むこと
市長 新たな計画は、本市の将来を支える若い世代に底力がつく、熱意に溢れたものにしてほしい。

市立学校の取り組みを紹介します
第七小学校
自分の思いや友達のことを大切に、主体的に学校を楽しく豊かにしようとする児童の育成

活動」を中心に、全学級の学級会グッズやマニュアルを作成し、「どの学級でも学級会が当たり前に行えるようにすること」を目指して研究をスタートしました。
分科会ごとに目指す児童像を明確にし、研究主題を「自分の思いや友達のことを大切に、主体的に学校を楽しく豊かにしようとする児童の育成」一人一人が学級の一員としての意識をもつて、えを大切に、主体的に学校を楽しく豊かにしようとする児童の育成

また、手だてとしては、低学年では学級会オリエンテーションや意見をまとめるヒント表の活用、中学年では提案理由の軸となる言葉に赤線を引くこと、ハンドサインの活用、提案理由に基づいた活動の振り返り、高学年では司会グループの座席の工夫や反対意見が出たものをどう改善していかばよいかを考える時間を大切に話し合いの進め方、しらゆり学級では発言をする時の話型の提示、見通しをもたせる視覚教材の活用、意見のまとめ方の提示等を行ってきました。

教育委員会の動き

《教育委員会委員が任命されました》

令和5年第3回市議会定例会において、植村芳美(うえむらよしみ)氏が議会の同意を得て、教育委員に任命されました。任期は令和5年10月1日から令和9年9月30日までの4年間です。



植村委員

植村委員に、教育委員に就任された思いを伺いました。

「コロナ禍を経て多くのことが急激な変化を迎え、学校教育もまた変化を求められています。学校現場はこれまでのような前を見て黒板を写す授業から脱却し、全員に配られたタブレットを使ってそれぞれの意見をまとめ、モニターで確認し合い、さらに自分の意見を高めていく。歴史ならその年代を記憶するのではなく、なぜそのような事件が起きたのかをみんなで追究し合う、そんな授業が求められるようになってきました。これからの世界に出ていく子どもを育てるためには大いに大事なことです。そのような変化の大きい学校教育の中で、支援を要する子どもは確実に増えています。学校において支援をどう展開し、自己肯定感をどう育み、不登校問題にどう向かうのかも、とても大切なことです。

10月からのまだ短い教育委員としての活動の中ですが、地域について改めて学ぶことができ、コミュニティ・スクールについても、未来の学校教育に関わる大きな課題と捉えています。私は人生のほとんどを「学校」という社会で過ごしてきましたので、私の役割として、学校現場の情報を率直にお伝えし、学校教育の充実のための具体的な一歩に役立つよう努めることだと思っています。これまでの経験を生かし、教育委員の一員として皆様のご期待に応えられるよう努めていきます。」

《議案の審議結果》(期間) 令和5年第7回定例会(7月14日開催)～令和6年第3回定例会(2月29日)
【案件】生徒表彰1件▶委員・学校医等の委嘱2件▶臨時代理1件▶教科書採択1件▶計画・報告の策定3件▶予算7件▶文化財の指定2件(全ての議案は承認されました)。詳しくは教育総務課庶務係☎042・470・7775へ。

《編集後記》本号をもって書き手が代わります。長い間、ありがとうございました。

第七小学校では、昨年度から校内研究で特別活動の研究を始め、2年目になります。今年度は「東久留米市教育委員会研究奨励校」として、研究を進める機会をいただきました。特別活動の中でも「学級活動(1)話し合い」

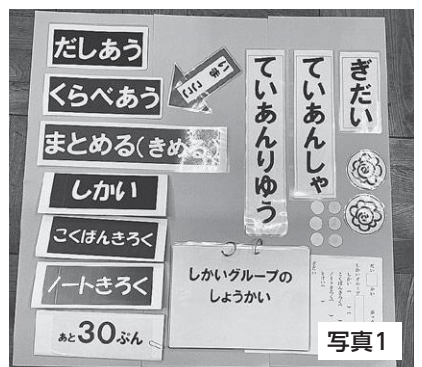


写真1

「だしあう」「くらべあう」「まとめる(きめ)」「しかい」「こくはんきょうく」「ノートきょうく」など30ふん
「だしあう」「くらべあう」「まとめる(きめ)」「しかい」「こくはんきょうく」「ノートきょうく」など30ふん
「だしあう」「くらべあう」「まとめる(きめ)」「しかい」「こくはんきょうく」「ノートきょうく」など30ふん

また、手だてとしては、低学年では学級会オリエンテーションや意見をまとめるヒント表の活用、中学年では提案理由の軸となる言葉に赤線を引くこと、ハンドサインの活用、提案理由に基づいた活動の振り返り、高学年では司会グループの座席の工夫や反対意見が出たものをどう改善していかばよいかを考える時間を大切に話し合いの進め方、しらゆり学級では発言をする時の話型の提示、見通しをもたせる視覚教材の活用、意見のまとめ方の提示等を行ってきました。

伊藤幸二